

ナメコ種菌培養ビンについての提言

ナメコはエノキタケやヒラタケに比べて、害菌に弱く、また生活環も複雑で変化しやすいという大きな特徴をもっているほか、培養日数も長くかつ発茸には比較的高い温度で湿度も多く必要とする等、害菌対策上人工栽培には特に慎重を要する菌である。

昭和49年頃、北信地方を中心に、害菌の被害によるナメコの不作現象が問題となり、現地調査を行ったところ、種菌の製造過程に大きな問題があるように感じられた。非常に無菌的配慮の欠けた施設で、エノキタケと性格の異なるナメコの菌を、同じように扱っていた。したがってこれらの点を指摘すると共に、栽培の方法にも言及し、今日の栽培技術体系の基礎をつくり、改善を指導してきた。

現在本県には、種苗法に基づく種菌の製造販売を目的とした届出業者は、農協を中心に28業者あるが、これらは国の指導基準であるシイタケ種菌製造管理基準に満たないものが大部分を占め、接種室はよくても、全般的に培養室のクリーン度が低い実態である。しかし最近建設され特に優れた施設では、接種室は勿論、培養室まで同じ程度に高いクリーン度を保てるようになっている。

ところで、如何に優れた無菌的な施設で製造された種菌でも、一度製造所を離れた時点からは、害菌汚染の機会が非常に多くなる。したがってこのような汚染を防ぐためには、種菌培養ビンの改良が必要である。現在使われているのは紙栓や簡易なPPキャップ栓で、これらは必ずしも無菌的配慮を十分に考えたものでなく、エノキタケに使えるからというだけである。ナメコ種菌の培養はエノキタケの3倍の期間を要するうえ、菌の性格も異なるので、現在の種菌製造施設では不備な点のあること等を考えると、今後ナメコ種菌独自の培養ビンの早急な改善を提言するものである。

(経営部長 齊藤利隆)